

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00536

研究課題名(和文) 等位接続構造に注目した、冠詞言語と無冠詞言語の違いに関する意味論的、統語論的研究

研究課題名(英文) A semantic - syntactic study on the differences between article and articleless languages, focusing on coordinating conjunction structures

研究代表者

金子 真 (Kaneko, Makoto)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：00362947

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究ではまず次の2点を確認した：(1)仏語の指示的名詞句は通常冠詞を伴うが等位接続構造では無冠詞が許容される；(2)日本語と異なり仏語では等位接続名詞は数詞・限定詞を一つだけ伴う場合相容認度が低い。そしてこれらの現象を説明するため、仏語のような冠詞言語では名詞の限定がもつばら名詞句内で行われるため指示対象のメンバーの均質性が要求されるが、日本語のような無冠詞言語では名詞の限定は名詞句外の要素が担うためそうした制約は課されないと提案した。さらに日本語の数詞が等位接続名詞と容易に結びつくのは類別詞により均質性が保証されるためであり、一方仏語では均質性を得るため名詞自体が類別詞として働くことを主張した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では仏語と日本語において冠詞の有無と相関して指示詞、複数形の働きと統語構造が異なることを示し、日仏対照研究および冠詞言語と無冠詞言語の違いについての研究を進展させた。また等位接続構造に注目することにより、固有名詞の名付け用法(例：3人の太郎)・換喩的用法(例：3冊の漱石)と普通名詞との関係について新たな知見をもたらした。更に固有名詞が等位接続される場合、メンバーの一体性を強調するため仏語で定冠詞が、日本語で複数接尾辞が剩余的に用いられる(例：les Tom et Jerry；トムとジェリーたち)ことを指摘し、特別な意味効果を狙う際日本語と仏語の間に意外な共通点があることも示した。

研究成果の概要(英文)：This study first pointed out that (1) while referential NPs in an argument position usually should be accompanied with an article in French, the lack of determiner is admitted in coordinating structures, and (2) the coordinated nouns preceded by only one numeral or determiner are usually not fully accepted in French, which is not the case with Japanese. To account for these phenomena, it was argued that determination and pluralization are accomplished, in article languages like French, within the DP and require referential uniformity while referential non-uniformity is allowed in articleless languages like Japanese since expressions outside the DP serve to restrict nominal denotation or to precise the plurality of the members. It was further claimed that one numeral is easily followed by coordinated nouns in Japanese since a numeral classifier assures referential uniformity while, when modified by a numeral, a noun itself serves as classifier in French to obtain referential uniformity.

研究分野：言語学、フランス語学、日仏対照言語学、意味論、語用論、統語論

キーワード：冠詞言語と無冠詞言語 等位接続 限定詞 累加複数と結合複数 類別詞 指示的均質性 固有名詞 伴連れ代名詞構文

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、冠詞言語と無冠詞言語では冠詞の有無と関連して何が異なるのか、という問いがある。この問いに対し、次のように論じられることがある。「両タイプの言語では名詞の意味自体が異なる。冠詞言語では普通名詞は属性を表し、可算名詞と非可算名詞の区別がある。無冠詞言語では普通名詞は種を表し、全ての名詞が非可算であるため、メンバーを数えるためには類別詞が必要であり、冠詞言語に見られるような複数形は存在しない」。一方で、「無冠詞言語でも可算名詞と非可算名詞の区別を示す統語的・意味的証拠があり、複数形も存在する。無冠詞言語でも名詞の基本的意味は冠詞言語と同様、属性である」と論じる先行研究もある。

2. 研究の目的

こうした議論を背景として、本研究では後者の立場を取りつつ、冠詞言語と無冠詞言語の間の違いが名詞自体の意味ではないとすると何が異なるのかを、名詞句の等位接続構造に注目し明らかにすることを第一の目的とした。さらに本研究代表者が以前の研究課題で扱った冠詞の有無以外の不定表現、数詞、指示詞、複数形に見られるフランス語と日本語の間の違いも統一的に説明することを目指した。

3. 研究の方法

まず次のような等位接続構造に見られる日本語とフランス語の違いに着目した：(1) フランス語では項位置に現れる指示的名詞句は通常必ず冠詞を伴うが、等位接続構造の場合は無冠詞が許容される (e.g.(1a))、逆に等位接続名詞句全体にかかるような冠詞や数詞は容認度が低い (e.g.(1b-c)); (2) 日本語では、数詞 + 類別詞や指示詞が、等位接続名詞句全体にかかることができ (e.g.(2a-b)、さらにフランス語の複数形-s と異なり (e.g.(1d))、タチは等位接続句全体にかかることができる (e.g. (2c))。

- (1)a. Philosophes et linguistes se sont toujours accordés à reconnaître que... (ソシユール)
'Philosophers and linguists have always agreed in recognizing that...'
- b. ??Les [philosophes et linguistes] se sont toujours accordés à reconnaître que...
'The [philosophers and linguistes] have always agreed in recognizing that...'
- c. ??Huit [philosophes et linguistes] se sont accordés à reconnaître que...
'Eight [Philosophers and linguistes] have always agreed in recognizing that...'
- d. *[philosophe et linguiste]-s
'[philosopher and linguist]-s
- (2)a. 8人の[学生と教員]が改革案に反対した。
- b. 高専並びにその[学生と教員]の社会的価値は... (google)
- c. [学生と教員]たちは、改革案に反対した。

こうした違いを説明するにあたって、先行研究ですでに指摘されているように、フランス語でも frères et sœurs 「兄弟姉妹」のようなイディオム的な等位接続の場合は冠詞を一つだけ伴うことができること (e.g.(3))、等位接続名詞句が関係節を伴う場合は数詞・冠詞を一つだけ伴うことができること (e.g.(4a) vs. (4b), (5a) vs. (5b)) に注目した。

- (3) Avez-vous **des** [frères et sœurs] ?
'Do you have **不定冠詞複数** [brothers and sisters]?'
- (4)a. ***cinq** [professeurs de lycée et étudiants de première année]
'**five** [high school teachers and first-year students]'
- b. **cinq** [professeurs de lycée et étudiants de première année] qui ont signé la pétition
'**five** [high school teachers and first-year students] who signed the petition'
- (5)a. ??Les [locataires et propriétaires] se retrouvent dans la cour tous les dimanches.
'The [tenants and owners] meet in the yard very Sunday.'
- b. Les [locataires et propriétaires] qui le souhaitent se retrouvent dans la cour tous les dimanches.
'The [tenants and owners] who wish it meet in the yard very Sunday.'

そしてフランス語において等位接続名詞句が無冠詞であることが許容され、また数詞・冠詞を一つだけ伴うことが困難なのは、「フランス語のような冠詞言語では冠詞等の限定詞や数詞の使用には名詞句の指示対象の均質性が要求される」ためであると提案した。この分析によると、(1a-c)、(4a)、(5a)ではそれぞれ、指示対象の集合の中に「哲学者と言語学者」、「高校教員と1年生」、「借家人とオーナー」という異質なメンバーが含まれるため、冠詞や数詞を一つだけ伴うことは困難である。そして(3)、(4b)、(5b)が容認されるのは、等位接続名詞句がイディオムであることによって、あるいは関係節を伴うことによってメンバーの均質性を得ることができるためである。

それではなぜ日本語では(2a)に見られるように数詞 + 類別詞が等位接続名詞全体にかかるこ

とができるのか？この問いに対しては、日本語では「人」等の類別詞がメンバーの均質性を担保するためであると主張した。この観点からするとフランス語のような冠詞言語においても類別詞が存在しないわけではなく *cinq professeurs* ('five teachers') の場合には名詞 *professeur* 自体が類別詞として機能すると考えることができると提案した。

次に、日本語ではなぜ(2b-c)に見られるように指示詞や複数接尾辞が等位接続名詞全体にかかることができるのかという問題を検討した。その際指示詞や複数接尾辞の統語構造に注目した。本研究の代表者は 2014-2016 年度基盤 C「日本語におけるモーダルな不定表現の意味論と統語論」(研究課題番号：26370450)において、ダレカのような不定表現及び数詞+類別詞は、冠詞言語の不定限定詞、数詞と異なり名詞句外に位置すること(e.g.(6a-b))、日本語の指示詞は形容詞に後続できるのに対し冠詞言語である英語の指示詞は名詞句の左端に位置しなければならないこと(e.g.(7a-b)) から、不定表現、数詞+類別詞、指示詞は名詞句内ではなく名詞句と同格的な付加詞位置を占めると提案していた。

- (6)a. 学生が昨日ダレカ来たようだ。
- b. 学生が昨日 3 人来たようだ。
- (7)a. 赤いソノ車 / ソノ赤い車
- b. *red that car / that red car
- (8)a 宮城県南三陸町立名足保育園の子供たち。(google)
- b. 半年かかってやっと両想いになったうちたち。(google)

また日本語の複数接尾辞は均質なメンバーの集合を表す累加複数に加えて異質なメンバーの集合を表す結合複数用法 (e.g. 太郎たち) も持つことも知られている。さらに本研究の代表者は 2011-2013 年度基盤 C「日本語の複数表現の意味論と語用論」(研究課題番号：23520463)において、複数の複数接尾辞が共起し得ること (e.g. (8a-b)) も指摘していた。こうした現象を考慮し、本研究では複数接尾辞たちも名詞句内ではなく名詞句の外部の付加詞位置を占めると提案した。

その上で、冠詞言語と無冠詞言語の間の統語的・意味的違いについて以下のような仮説を提案した：冠詞言語では定・不定の限定詞、数詞、複数形は名詞句内の特定の統語的位置を占めており、名詞句が表す均質なメンバーの集合から該当するメンバーを選択することによって指示対象の限定が行われる、さらに均質なメンバーを組み合わせることにより複数化が行われる。一方無冠詞言語では名詞句と同格的な付加詞位置を占める指示詞、不定表現、複数接尾辞により指示対象の限定と複数化が行われるが、こうした操作を行うに当たって均質なメンバーからなる集合は必要とされない。

4. 研究成果

本研究の主な成果は、冠詞言語と無冠詞言語の根本的な違いは名詞自体の指示のあり方ではなく、統語構造の違いに起因する名詞の限定のあり方に存すると示したことである。この結論が正しければ、冠詞言語話者が無冠詞言語を学ぶ際、逆に無冠詞言語話者が冠詞言語を学ぶ際、名詞句に関わる自らの母語と学習言語との間の統語的な違いにより注意するよう促す必要があると考えられる。

また本研究では上記のように、冠詞言語では名詞自体が類別詞として機能すると想定するが、「冠詞言語においても統語構造において見えない類別詞句が存在し名詞自体がその類別詞句の位置を占める」と主張する先行研究も存在する。しかしこうした仮説を等位接続構造に着目することにより経験的に裏付けたことも、本研究の成果の一つである。今後はフランス語以外の冠詞言語、日本語以外の無冠詞言語に研究の対象を広げ、本研究の結論が一般性を持つか検証することが課題である。

また本研究はコロナ禍にあって 2 年間研究期間を延長したが、その間普通名詞のみならず固有名詞の等位接続構造を検討することにより、研究開始当初は想定していなかった方向に考察を広げることができた。以下 2 点についてその成果を示す。

(1) 固有名詞の名付け用法と換喩用法

固有名詞には唯一の指示対象を指示する通常の指示的用法以外に、名付け用法 (e.g. 「このクラスには 3 人の鈴木さんがいる」)、換喩用法 (e.g. 「3 曲のバッハ」) と隠喩用法 (e.g. 「全く彼はドンファンだ」) が存在することが知られており、これらの用法は普通名詞と共通点を持つと論じられている。先行研究によれば特に名付け用法が普通名詞に近いとされている。本研究では名付け用法と換喩用法について、等位接続構造に注目することにより、普通名詞と共通点を持つか、もしそうであればどちらの方がより普通名詞的な振る舞いを示すかを検証した。

まず名付け用法の等位接続も、換喩用法のそれも、通常冠詞や数詞をそれぞれ 1 つだけ伴うことはできないが、制限関係節に修飾される場合それが可能となることを指摘した (e.g. (9a) vs. (9b), (10a) vs. (10b))。同様の現象が普通名詞の等位接続にも見られることから (e.g. (4a) vs. (4b), (5a) vs. (5b))、これら 2 つの固有名詞の用法は確かに普通名詞と共通点を持つことを確認した。

- (9)a. **Les quatorze* [Monet et Cézanne]
 '*the fourteen* [Monet (モネの絵画 and Cézanne (セザンヌの絵画)]'

- b. **Les quatorze** Monet et Cézanne qui se trouvent dans ce musée
 ‘**the fourteen** [Monet and Cézanne] which exist in this museum’
- (10)a. ***Les cinq** [Camille et Dominique]
 ‘**the five** [Camille (カミーユという名前の人) et Dominique (ドミニックという名前の人)]’
- b. [フランス語では Camille カミーユと Dominique ドミニックという名前は男性にも女性にも使える。しかし]
Les cinq [Camille et Dominique] que je connais sont toutes des filles.
 ‘**The five** [Camille et Dominique] who I know are all girls.’

さらに(11a)が示すように換喩用法の固有名詞と普通名詞が等位接続された場合その全体に限定詞がかかることは可能であるが、(11b)が示すように名付け用法の固有名詞と普通名詞が等位接続された場合は1つの限定詞がその全体にかかることは困難であることも指摘した。

- (11)a. [この展覧会では北斎の版画2点と国宝である絵画2点が目玉である]
Ces [Hokusai et trésors nationaux] attirent plus de 10 mille visiteurs chaque semaine.
 ‘**These** [Hokusai and national treasures] attract more than 10 thousand visitors every week.’
- b. [クラヴェール弦楽四重奏団は兄弟姉妹がメンバーでその名は彼らの姓から取られている。この四重奏団はお気に入りのチェリストとよく共演をする。]
 L’autre jour, ***les** [Kravehl et violoncelliste] ont joué le quintette à cordes de Schubert.
 ‘The other day, **the** [Kravehl and cellist] played Schubert’s string quintet.’

こうした観察から本研究では、名付け用法の固有名詞よりもむしろ換喩用法の固有名詞の方が普通名詞に近いのではないかと提案した。今後はより多くの用例を調べこの仮説の妥当性を検証するとともに、隠喩用法など他の固有名詞の用法まで調査対象を広げることが課題である。

(2) 指示的用法の固有名詞の等位接続が剩余的な定冠詞または複数接尾辞を伴う場合

本研究代表者は上記の研究課題 23520463 において、(12a-b)のように日本語の複数接尾辞タチが指示的用法の固有名詞もしくは代名詞の等位接続全体にかかり、削除しても真理条件的意味は変わらないという点で剩余的と言える例があることを指摘していた。

- (12)a. [トムとジェリー]タチがお互いに争うシーンが少ないので、面白さは少なめ。(google)
 b. [君と僕]タチ二人は世界最高のフィアンセで...(シャンソン「雨の降る日」の日本語訳)

本研究を進める中で、フランス語の定冠詞にも(13a-b)に見られるように、指示的固有名詞の等位接続全体にかかる、剩余的とも考えられる例があることを観察した。

- (13)a. **Les** [Mignon et Charrier] s’étaient approchés ... (ゾラ)
 ‘**The** [Mignon and Charrier] had approached...’ (2人はゾラの小説『獲物の分け前』の登場人物でいつも一緒に行動する)
- b. **les** [Laurel et Hardy]
 ‘**The** [Laurel and Hardy] (デュオで活躍するコメディアン)の2人)

そしてこうした一見剩余的なタチや定冠詞の使用について以下の分析を提案した。上記のようにフランス語の冠詞は通常同一の名詞によってメンバーの均質性が保証される場合にしか用いることができない。しかし例(3)の des frères et sœurs「兄弟姉妹」のように等位接続された名詞がイディオムとなっていて結びつきが強い場合は冠詞が名詞句全体にかかることができる。(13a-b)ではこうした冠詞の性質を利用し、むしろメンバー間の結びつきの強さ・行為における一体性を強調するために冠詞が用いられていると考えられる。日本語の複数接尾辞タチは基本的には異質なメンバーの複数性を表すが(12a-b)のような例ではフランス語の定冠詞と同様メンバーの結びつきの強さを強調するという文体的な理由で用いられている。

さらに用例を収集し検討した結果、「固有名詞1+固有名詞2+タチ」もしくは「代名詞1+代名詞2+タチ」と「定冠詞+固有名詞1+固有名詞2」という連鎖においては、下記のようにタチは固有名詞2(もしくは代名詞2)に、定冠詞は固有名詞1にと、より近い名詞だけに係る例が多いという観察を得た。

- (14)a. 僕と[君たち]は教師と学生の関係だ
 b. 冬樹と[ケロロたち] (google)
- (15)a. en passant par [**les** Goncourt (=兄弟 Edmond と Jules)] et Zola (サルトル)
 ‘via [**the** Goncourts] and Zola’
- b. Paul se retournait vers [**les** Orgel (=夫婦)] et François (ラディゲ)
 ‘Paul was turning towards [the Orgels] and François’

さらに(12a-b)のタチや(13a-b)の定冠詞は、例(16)に見られるいわゆる「伴連れ代名詞構文」に類似していると指摘した。この例では一見すると nous deux「私たち二人」の外部にあると思われる前置詞句 avec la daronne「ママと」が意味上代名詞の内部にあると再分析され「私とママの私たち二人」と解釈される。

- (16) **nous deux** avec la daronne (セリーヌ)
'us two with the mum'

同様に(12a-b)や(13a-b)では通常近い名詞だけに係るタチや定冠詞が、メンバーの結びつきの強さ・一体性を表すという文体的な理由で等位接続名詞全体に係るように統語的再分析を受けていると提案した。この提案が正しいとすると、冠詞言語であるフランス語と無冠詞言語である日本語は名詞句等位接続の典型的な例では確かに大きな違いを示すが、文体的効果を狙った周辺的な例では意外な類似点があると言える。

ところでフランス語の「定冠詞 + 固有名詞 1 + 固有名詞 2」という連鎖を収集する中で例(17)のように定冠詞の後に数詞を伴う例がいくつか観察された。この例では *les deux* ('the two') が独立した名詞句として働き後続の等位接続名詞句と同格の関係にあるとも考えられる。

- (17) **les deux** Sophie et Juliette (フランテクスト)
'the two Sophie et Juliette'

上記のように本研究は、日本語では指示詞、不定表現、複数接尾辞、数詞 + 類別詞等が統語的には名詞句と同格の関係をなすと考えるが、この点で(17)のような例における限定詞 + 数詞と等位接続名詞の関係の在り方は日本語と類似点があるかもしれない。フランス語における名詞句の同格構造とその意味については、今後さらに検討が必要である。また(13a-b)のような例と(17)のような例の関係をどのように捉えるべきか、(13a-b)でも定冠詞の後に数詞相当のものが省略されていると考えることができるのかについても、今後検討が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Kaneko Makoto	4. 巻 78
2. 論文標題 Comment situer les emplois denominatif et metonymique des noms propres par rapport a leur emploi referentiel et aux noms communs -- les cas de la coordination nominale	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 SHS Web of Conferences	6. 最初と最後の頁 12008 ~ 12008
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1051/shsconf/20207812008	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 金子真	4. 巻 29
2. 論文標題 フランス語と英語における、3つのタイプの動詞の必須項でない与格について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 青山フランス文学論集	6. 最初と最後の頁 55-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34321/21662	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Makoto Kaneko	4. 巻 46
2. 論文標題 La determination et la pluralisation : l'exigence de l'uniformite referentielle	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 SHS Web of Conferences	6. 最初と最後の頁 12010 ~ 12010
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1051/shsconf/20184612010	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 金子真	4. 巻 27
2. 論文標題 否定文における、対比を伴う不定代名詞の解釈について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 青山フランス文学論集	6. 最初と最後の頁 55-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34321/20700	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Makoto Kaneko	4. 巻 138
2. 論文標題 Un emploi de l'article défini pluriel du français et du suffixe pluriel du japonais introduisant une coordination inclusive et comitative	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 SHS Web of Conferences	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1051/shsconf/202213811019	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計14件(うち招待講演 0件/うち国際学会 13件)

1. 発表者名 Kaneko, Makoto
2. 発表標題 L'article défini pluriel et le suffixe -TATI qui indiquent la coordination inclusive et comitative
3. 学会等名 Les Rencontres bordelaises de linguistique corenne et japonaise (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shimura, Kanako & Kaneko, Makoto
2. 発表標題 Comment les slogans publicitaires de forme imperative sont-ils reliés au nom adjacent ?
3. 学会等名 Formes d'injonction dans l'espace public urbain (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Makoto Kaneko
2. 発表標題 The scope of 'someone' in the infinitive complement of negated want: ambiguity of 'want' and possibility of Neg-lowering
3. 学会等名 CSSP 2019 (Colloque de Syntaxe et Semantique a Paris) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Makoto Kaneko
2. 発表標題 Le demonstratif dans les phrases nominales des affiches publicitaires en japonais et en francais
3. 学会等名 Colloque international "Lexique et frontieres de genres" (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Makoto Kaneko
2. 発表標題 La determination et la pluralisation : l'exigence de l'uniformité référentielle
3. 学会等名 5eme congres mondial de linguistique francaise (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Makoto Kaneko
2. 発表標題 Positive Polarity Items out-scoped by a clause-mate negation?-- I don ' t need someone else
3. 学会等名 Workshop The constellation of polarity sensitive items. the 51st Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Makoto Kaneko
2. 発表標題 Points communs et differences entre les emplois denotatif et metonymique des noms propres : les cas de la coordination en francais et en japonais
3. 学会等名 Colloque " Le Nom " Sorbonne Universite (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 C. Copy, R. Nita & S. Bedouret (dir.)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Presses Universitaires de Pau et des Pays de l'Adour	5. 総ページ数 446
3. 書名 Lexique et frontieres de genres (所収の論文 Les phrases nominales exclamatives introduites par le demonstratif du japonais et du francais - affinite entre les proprietes lexicales du nom tete et le genre publicitaire. 著者 Makoto Kaneko, 16頁)	

1. 著者名 C. Pinon & L. Roussarie (eds.)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 CSSP	5. 総ページ数 170
3. 書名 Empirical Issues in Syntax and Semantics 13 [http://www.cssp.cnrs.fr/eiss13/] (所収の論文 Non-responsibility and narrow scope reading of positive polarity indefinites in negative imperatives and negated controlled infinitive complements. 著者 Makoto Kaneko, 30頁)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------